集落内の他組織との連携等

【和歌山県海南市　中山間上集落協定（かいなん　ちゅうさんかんかみ）】

役割分担による効果的な獣害対策と研修体制の工夫による地区全体の生産技術を高める取り組み

○猟友会会員が集落協定の役員を務め、効率的に獣害対策を実施。
○集落協定役員が積極的に研修会に参加し、構成員と共有することで生産技術が向上できる体制を構築。

地区の課題

深刻な獣害と農業技術の向上

当地区は古くから温州みかんの栽培が盛んであるが、イノシシやアライグマなどの獣害が深刻になってきており、農業生産活動に支障をきたしている。

また、農業に従事する時間が長いため、生産技術の向上や獣害対策に充てる時間が多く取れない状況である。

さらに、園地にある石積みは古くに作られたため、崩れやすく、石積みの補修が課題となっている。

【上集落の全景】

【イノシシに破られた防護柵】

取組内容

猟友会での経験を生かした獣害対策の実施

・増加する獣害に対応するために、令和2年度から集落協定の役員に猟友会会員が入ったことをきっかけに、猟友会での経験を生かした獣害対策を実施している。
・交付金の共同活動費を活用して獣害の防護柵を購入している。また、猟友会会員と集落協定構成員で組織した対策部隊には罠の設置（捕獲）を依頼し、集落協定構成員全員で防護柵の補修（侵入防止）を実施し、役割分担をしながら獣害対策を行っている。

【罠の設置作業】

積極的な研修会への参加と勉強会の実施

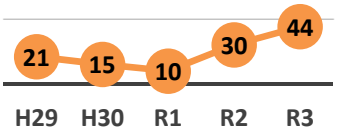
・第1期から集落協定構成員が生産技術の向上を目指し、5年に1度研修会に参加していたが、第5期からは、集落協定役員が分担して摘果講習会、スマート農業研修会、石垣積み講習、環境保全型農業栽培技術現地研修会など多くの研修会に参加し、その後集落協定内で勉強会を行う体制を構築している。
・集落協定役員から学んだ知識を活かして、集落協定構成員が自分で崩れやすくなった農地法面の補修（石積み補修）を行っている。

【石積講習会の様子】

取組の成果

捕獲頭数の増加と防護柵の補修

・役割分担を明確し、効率的に獣害対策ができるようになったため、集落協定構成員は農業に注力できるようになった。
・上集落で捕獲されたイノシシ・アライグマの頭数は平成29年度は21頭だったが、共同活動費で罠を購入して提供することで、令和3年度は44頭に増加し、獣害を軽減できた。
・集落協定構成員が防護柵の一斉点検を行い、令和3年度までに延長10kmの防護柵の補修ができた。



【年度別イノシシとアライグマの捕獲頭数の推移】

地区全体の生産技術の向上

・第5期では研修会の参加頻度を増やし、かつ、集落協定構成員にフィードバックするための勉強会を実施したことで、集落協定構成員の生産技術が向上し、生産性の向上につながっている。第5期ではこれまでに勉強会を2回開催した（スマート農業と石積み補修）。

【結果】
・スマート農業を実施する農家が0戸から２戸に増加した。
・石積み補修については、自分たちが補修することで、外部に委託するより補修費用を軽減することができている。また、急な事態に対応することも可能となった。

取組地域の概要

○位置

○地域の概要
・海南市下津町に位置しており、古くからみかん栽培が盛んで、日本農業遺産「下津蔵出しみかんシステム」に認定されている地域である。
○主要作物
・　温州みかん

○集落協定の概要(R3現在)
面　積：53.6ha (畑)
交付金額：937万円
（個人配分83%、共同取組活動17%）
構成員：農業者58人
協定開始：平成12年度

１ 地区の概要

温州みかんの栽培が盛んな地域

――地区の特徴を教えてください。

1年を通じて降水量も日照時間も安定している瀬戸内海気候に近い気候の地域です。温州みかん以外の畑も少しはありますが、主に温州みかんを栽培しています。

集落協定の構成員は５８名で、協定を開始した平成１２年度から農地を減らさないように気を付けながら農地を維持・管理をしてきました。しかし、協定構成員の約６５％が６５歳以上と高齢化が進み、脱退する構成員も出てきました。最近では、新型コロナウイルス感染症の影響により集落内でのコミュニケーションも取りづらくなってきていますが、なんとか地区のみんなで助け合いながら取り組んできました。

２ 地区の抱える課題

増える鳥獣被害に減るマンパワー

――今、地区が考える一番の課題って何ですか？

２０年前まではほとんどなかった獣害が、１４，５年前からイノシシの被害が出始めるようになりました。初めはイノシシによる被害が主でしたが、徐々にアライグマによる被害も増えてきました。被害が多くて正確には把握できていませんが、イノシシが移動することによって石垣が崩されたり、収穫前のおいしいみかんが食べられたり、「とらかずら」の根っこを食べるために地面を深く掘り返されたりするなどの被害があり、みかん栽培の意欲がなくなってしまいます。さらに、最近は、カラスやヒヨドリによる鳥害も出始め、さらに困っています。農業者の高齢化が進み、日々の農作業の他に鳥獣害対策に充てる時間も余力もないため、このままでは廃園が増えてしまうのではという危機感がありました。

【被害を受けたみかん園】

――高齢化が進むことで他に苦労していることは？

販売単価を上げるためには、消毒作業の回数を増やして品質を上げることも考えられますが、消毒作業の回数を増やせば、当然労力が必要になります。高齢化が進むと作業量を増やすことが難しく、販売単価を上げることができません。また、収穫時期になると知り合いに頼んだり、ハローワークに求人を出すことが多く、人手を確保するのにも苦労しています。

３ 取組の経緯

獣害による耕作意欲低下を防ぐため、地域全体での鳥獣害対策を実施

――鳥獣害対策を実施するきっかけは？

イノシシによる獣害が出始めたころに、防護柵の資材費助成があったため、地区のみんなで地区全体を囲う防護柵を設置しました。これにより被害を小さくすることはできましたが、地区間をつなぐ農道は閉鎖できないため、そこからイノシシに侵入されるような状況になりました。平成２４年からイノシシの捕獲に対する海南市から助成（捕獲報奨金）が開始されるなど獣害対策の意欲が向上しましたが、それでも増え続ける獣害に対応が追いつかなかったため、第３期では直払交付金や他の補助金を活用して檻（罠）を購入・設置し、檻（罠）の設置（捕獲）と防護柵の補修（侵入防止）を役割分担をしながら行うこととしました。また、第５期からは猟友会会員が役員になり、猟友会での経験を活かし、イノシシが嫌うもの（イチジクの実や乾燥した枝、唐辛子を混ぜた忌避剤）をみかん園に撒く等の効果的な対策を実施しています。

４ 取組の内容

役割分担が重要

――作業はどうやって実施しているの？

毎年９月に協定構成員全員で地区を囲う柵の点検作業を行っています。点検した後、役員で補修作業を行っています。近年、廃園が増えており、イノシシが潜んでいないか注意しながら点検作業を行わないといけないため、点検作業が大変になってきています。しかし、この点検作業を毎年行っていることが、被害を食い止められていると考えてるため、やめることはできません。

【防護柵見回り点検の様子】

また、１０月から１２月にかけて地区内の１０カ所に檻を設置し、捕獲対策を行っています。猟友会を含めた協定の役員２名と各班の班長５名の合計７名が実行部隊となり、月１回のペースで檻（罠）の見回り点検や修復作業を行っています。

――どうやって研修会を実施しているの？

県や市から農業に関する情報を入手し、取捨選択できるように構成員に提供するのが役員の仕事と考えています。協定代表者は、農業士でもあるので、農業士会から研修の情報を得ることができています。その中で、県が開催する研修会に役員が参加したり、スマート農業等に関する情報を収集したりしながら、地区に研修会という形で情報共有しました。今は、インターネットでも情報を得られますが、みんなで話し合う貴重な機会にもなるので続けたいと思っています。

【スマート農業研修会の様子】

５ 取組の成果

課題へ取り組むことが農業者の生産意欲の維持･向上につながる

――獣害対策の効果はどうですか？

獣害対策があるため、今はそれほど農地が荒らされているということはありません。年1回の収穫時期に農産物をイノシシに食べられることほど農業生産に対する意欲がなくなることはありません。それを防ぐことができているので、集落協定構成員の生産意欲の維持にもつながっていると思います。

――研修会に対する集落の反応はどうですか？

地区内の研修会は、第５期に入ってスマート農業と石積み補修をテーマにして開催しました。研修会には若手農業者たちも参加してくれました。そして、２戸の農家がスマート農業に取り組みたいと言ってくれています。研修会での交流をきっかけに、若い人たちの知恵をもらうことにより、新たな発想が生まれるのではないかと期待しています。

６ 人材、資源、制度の活用方法、工夫

時勢にあった研修内容による開催と役員による声掛け

――研修会の開催に不安はなかったですか？

集落内の研修会に参加してくれる人がどれだけいるのかはとても心配でした。しかし、役員が地区の農業者に声かけをしてくれた結果、スマート農業研修会では上集落だけでなく他地区からの参加もありました。スマート農業というテーマは、みんなが興味を持っている内容だったこともあり、多くの方が参加してくれたのだと思います。

また、地区には農業の後継者もいるのですが、その後継者に農業技術がしっかりと引き継がれるまで、今の農家には一年でも二年でも長くみかん栽培に携わってもらいたいと思っています。そのために省力化できる部分は省力化し、情報発信など高齢者が苦手な作業は若い人に助けてもらうことが必要だと考えています。今年になって、協定構成員の息子など若い人たちに声をかけて、若手グループを作ってもらいました。上は４０代から下は２０代まで１２人が高齢農業者のお手伝いをしてくれています。

７ 地区の今後、他の地域に伝えたいこと

農家だけでなく、非農業者や他業種との交流により、新たな発想が生まれる

――今後の方向性は

今やっている農家だけでは農地や地区を維持していくことは難しいと感じています。そのためには、若い人、非農業者、他業種などとの交流が必要かなと考えていますが、今は他業種との交流の場がありません。そこで、若者グループに声掛けしてホームページ作成を頼んでいます。インターネットをきっかけにして若い人や他業種との交流の場がうまれ、そこからいろいろな発想や知恵を得ることができ、地区の維持につながっていければと考えています。